

第2弾 谷仲山方面へのまち歩き会 平成22年10月2日(土)

参加者 子ども13名 大人19名 計32名

渡辺生子（日野図書館分館長）：それでは、今日は「子ども発見隊」のまち歩き会をします。今日行くところは谷仲山地区といって、日野宿のちょっとはずれたところの、スーパーアルプスのあたりから上がる、そうですね。で、谷仲山。何で谷仲山というのかというのは、「谷」というのは「谷戸」という場所です。それから「仲」は「仲井地区」という、「仲井」という場所。それから「山」は「山下」という、三つの地区が一つになって「谷仲山」という自治会をつくっています。今日はそちらを歩いて、古い井戸だとか、それからお蔵の中を探索したり。最後は楽しい楽しい、電車をつくっているうちがあるのね。小さな、みんなが乗れる電車。今日は特別に電車を走らせてくれますので、みんなが乗ることができます。特別だからね。

それでは、今日はけがのないように、みんな歩いて行きますけど、まず今日の先生を紹介します。谷仲山から来た谷さん。谷さんという、いっぱいあるけどね、谷富二さんを紹介します。谷さん、お願いします。谷富二さんがガイドしますからね。



谷富二：今日は谷仲山を一通り歩いてみます

ね。それで谷仲山というところはどこかというところかな。前はどんなふうになっていたのかなというところを案内させていただきます。特に坂道等があるのでね、そういうところは気をつけてください。それと、ことしは虫が多いから、蚊にくわれたり何かしないように気をつけて歩いてみたいと思います。

日野図書館に集合



谷富二さん（右）

それと、私もちょっとおじいちゃんになったので、歩くのがもたもたしているんで、余り早く歩けないところもありますから、先に歩くにしてもお母さんたちの、よく言うことをきいて、とにかく1日、今日は半日ですけど、けがのないように。しかも楽しい時間を過ごさせていただきたいと思いますので、ひとつよろしく願います。

最後のSLのときには事故のないように、いろんな、ガイドさんとかを手伝ってもらいたいと思います。そのときにはちょっと服装が汚れるかもわかりませんが、ひとつその点もよろしく、あわせて願います。

渡辺：はい、ありがとうございました。今日訪ねるところも人のうちの中だからね。気をつけて入るのと。

谷：場合によったら、好きな人がいたら穴倉も入って、もぐってもらっても結構です。ただそのときは気をつけないと危ないからね。

渡辺：それで、最後が滝瀬さんというところで、電車をつくっているおうちに行って遊んできますけど、そこが最後になって、そこで解散という形になります。それで、皆さんにお願いしたいのは、滝瀬さんのおうちの庭で電車を走らせてやっているの、危険なのでお母さん方、すみませんけどできるだけ見守りを、ちょっと人のうちのところなので丁寧をお願いします。

あと今日のガイドの谷富二さん。それからサポーターをしてくださる写真家の井上博司さん。紹介します。はい、手を挙げて。井上さんに聞いてくださいね。あと加地勝さんです。日野の歴史と民俗の会とか、お地蔵さんなら詳しいので聞いてください。では出発しますので谷さんを先頭に、けがのないように。出発します。

【大門通り】



大門通り

不明：自転車通ります。

渡辺：旧道です。

谷：ですから今川崎街道の入口に「高幡動尊道」という碑がありますね。あれはここにあった。それで昭和横町、あそこができるときに移されたものです。

谷：いや、少なかったの。こっちには鍛冶屋さんがあってね、それからいわゆる棒屋、棒屋って言ったの。棒屋、棒屋というと何かわかるかな。農家や何かで使う棒や何かの棒。棒をつくってね、そういうことをやっていたから棒屋、棒屋って言ったの。

渡辺：屋号は「棒屋」。

谷：子どもを捕まえて坊や、坊やって言ったんじゃないんだよ。子どもをつくるから「ぼうや」じゃなくてね、農機具とかそういうものの握る棒ね。それをつくるので棒屋、棒屋と言ったんですね。

【一小裏の日野用水】

渡辺：用水ですよ、日野用水。日野用水はね、日野用水を引いたおかげで、日野は田んぼが豊かに、お米がとれるようになりました。日野用水です。今、日野用水には鮎がたくさん来ていますよ。この間もね、鮎を2匹とりました。



昭和 30 年代 古谷永治氏
撮影の写真パネル

谷：前はもうここからしか行けなかったんです。いわゆる昭和 40 年代まではここに家はなかったんです。全然、向こうまでね。ただ1軒、1軒今のここの広場がありますね。そこに1軒家があっただけです。

【大昌寺山門】

谷：この道はなかったです、この道は。

その後区画整理されて道路ができて、それでこちらに家もできたということになります。それで。

扇柳智賀：この辺は何だったんですか。

木とか。

谷：畑。そしてこっちは田んぼ。それで、お寺さんに入るときには一つのならわしとして、習慣というのがあって、一応入るときにここで。



大昌寺山門

渡辺：帽子を取ってお辞儀をしてください。

谷：帽子のない人は帽子をとれないからな。

それで、この大昌寺の橋のところ、右側に釣鐘がありますね。

渡辺：この鐘、鐘を見てください、右手にある。知っていますか。

谷：この鐘はいわゆる「時の鐘」というので、時間を知らせるために打った鐘です。

皆さん御存じのように、坂下地蔵さんって知っていますね。坂下地蔵さんのお地蔵さんを造った人は、(江戸神田鍛冶町の) 田川民部守(藤原見歳)です。その人が造った鐘がここにあったわけです。ところが戦時中はいろいろな金物を、武器を造ったり何かするので、兵器を製造するために供出されてしまって、それは現在ありません。これは新しく造った、埼玉県の人が造ったところの鐘です。ですからあれば非常に、坂下地蔵と大昌寺と、それから今度行くところの谷戸の念仏の叩き鐘は、同じ人が造ったものだという人があるんですね。そういうものだったそうです。

あそこから本堂を回ってお入りください。それで向こうはいろいろと昔ながらのものがああります。

【大昌寺境内】



阿彌陀様

谷：前は谷戸の山のところにあったわけ

ですが、日野市で緑地化ということで、日野には水と緑というように緑地帯をつくったんですね。そのときに区画整理、道路を整備したために置く場所が、個人のをこういうところに置くのができなくなって、こちらへ移したというものです。これはやはり元谷戸に住んでおった人が生前、自分が亡くなったら阿彌陀様へ行くということですね。

そういうことを願ってつくった像です。ですから生前に自分が阿彌陀様のもとに行くよいうにということのでつくられたものです。

以上で一応終わりますが、一応ここへ来ましたので、佐藤さんのところを。こちらから行って。皆さん、来るとわかるけれど、こういう具合にお墓には紋があるの。家紋というのがある。これは何か？ 知ってる？

渡辺：お坊さんのお墓というのは頭が丸くなっています。石の頭が丸いのは、ああこれはお坊さんのお墓だなど思っていてください。こういう形ですね、みんな。お坊さんのお墓は。

不明 (子ども)：お坊さんが中に入っているの？

不明：お坊さんが入っているの。

渡辺：こちらが上佐藤のお墓と下佐藤のお墓というふうに続きます。

谷：それでね、佐藤さんのお墓で特に一般のお墓と違うところは、墓碑の上を見てく

ださい。一般のところにはこういう家紋がないですよ。一般のところは下にあるわけです。これは上にあるんです。これはやはり特徴です。そういうことでいろいろと参拝しても気がつく人はいないんですよ。言うに「え、初めて聞きました」と。ということは、佐藤さんのところは古谷さんと非常に近い古い家です。それと有山さん。

清板：あああそこの、この間行ったところね。この間行ったでしょう、有山さんって行ったでしょう。あの家。大きな家、見せてくださった、前回行ったときに。

谷：これはあそこに近いんです。昭和横丁、いわゆる川崎街道に近いところに。

清板：本当、古谷さんが多いですね。

加地：市内には多いですからね。

谷：これは油屋の古谷栄さんのところ。だから昔はね。これが古谷さんという非常に大きな家ですね。

加地勝：これだけ説明します。ちょっと集まってください。向こうに立っているお地藏さん。これが今7基あるわけですが、こういうのは1基、2基と数えるので、7基あるんですけど、そのうちの六つ、右から六つね。これを普通六地藏といいます。

谷：一般に六地藏、六地藏とね。

加地：六地藏というのは人間が亡くなったあと、一度は地獄・極楽というところに行くわけですね。で、地獄のところへ行きまして閻魔大王さんに、あなたは生前どんな悪いことをしたかということ問われて、それで動くわけですが、その中に地獄道とか、それから極楽まで行く間に、地獄、修羅、畜生道、それから人、天というような形があるんですが、そこの辻々にお地藏さんが立ってその人の将来を見ているというような形であるんです。

で、普通はこういうふうには6基立つんですけどね、ここの中で、この一番左。これだけがちょっと変わっているんですね。これは一つの石の中に六つの、6体のお地藏さんを掘り込んであるんですね。この6体のお地藏さんですけど、ここに一つ、これは首がなくなっちゃいましたけど、ここに一つ。それから正面に一つね。それから右に二つ、上下に二つ、それから左に二つあります。これ、ここにお地藏さんが座っていたの。ほ



大昌寺境内のお地藏さん

かはみんな立っているけど、このお地蔵さんは座っていたの。ところが首がなくなっちゃったものだから何かいなということになったんだけど、これがお地蔵さんね。だから1、2、3、4、5、6という形のお地蔵さんの形なんだね。で、これ5組一緒にあるけどさ。それで日野の市内では一番古い六地蔵さんという形で、今からいうと240年ぐらい前につくられたものです。この形、こういう二つ二つ並ぶというのはあるんですけど、1石でこういう、両側それから正面、上に付くという形は、実は東京都内でも珍しい。ここにしかないという形ね。ほかのところにまだ、いろいろと歩いたんですが、余りこの形は見られません。一番古いものということと、珍しいということで覚えておいてください。じゃあ行きましょう。

【大昌寺参道】



大昌寺参道

山崎有実子：このところは遊歩道になっている。

加地：ここで特徴なのは、手が6本あるわけですね。「法輪」というのを持って、弓と矢と、それから「戟」(げき)といって剣ですね、を持っていると。それからずっと下のところに「邪鬼」といって、鬼ね。昔、鬼を踏ん付けていると。それからその下にお猿さんがありますね。お猿さんが3匹。これが「見ざる聞かざる言わざる」という、日光で聞いたことある？

日光の東照宮に左甚五郎の三猿のあるところ。ということで、そこに「見ざる聞かざる言わざる」というのを掘り込んである。これが一番基本的な庚申塚。これを、まあ覚えておいてください。これも実は1745年といいますから270年前にできたものです。これから谷戸のほうへ行きますと、日野で一番古いのがあります。

谷：これが今のあるところのところにあった。広場はもっと元は横のほうにあった。今の。

渡辺：下のほうだよ伊野さんといって。

清板：伊野さんって読売新聞じゃなくて？

谷：読売新聞の本家の方。

清板：そうですか。

谷：それでこの家は当時はこの川の向こうにあったんです。向こうにあって、田んぼの中に1軒あったんだね。これはもうあとのコンクリートですけどね、前は本当の石橋だったわけです。それでこの屋号が「石橋」。

不明：え、本当。

渡辺：石橋さんといううちかな。

谷：家は金子さんです。で、屋号は石橋さん。
どうしてかというところに堀があったんですね。
それで石橋があったわけです。

渡辺：屋号が石橋だって。

谷：それで石橋、石橋とね。

清板：あそこに「いなげや」ができてからすごく
変わったわね。

谷：歩道を歩いてください。なるべく歩道をね。

不明：寄ってください。

谷：ここは、以前は全部田んぼだったんです。

石嶋日出男（図書館）：はい、そこに写真（小学校南側門に展示中）があります。



昭和 35(1960)年頃
戸高要氏撮影
写真パネル



昭和 10 年代中頃 日野国民学校（現日野一小）が建設される前の様子

谷：そこにありますでしょ、そこからみな全部こういう田んぼですね。

石嶋：小学校ができる前ね。

谷：それで自動車道ができる前までは、ここにある家は、今自動車道があるこの山の下にあったんです。自動車道ができるのでこちらへ引っ越してきたと。ですから屋号は山の下にあったから山根という。姓は小池さんですけどね。山根の小池さんとかね、小池さんと言わないで名前で、山根のうっちゃんだとかね。清ちゃんだとか。私なんか谷戸の富ちゃん富ちゃんと言われていた。そういう時代です。ここは山根です。はい、まっすぐ行ってください。

それで、小学生の人は自分の学校の、第一小学校にはどんな木があるのかなということを、今日学校の先生によく聞いて覚えておいたほうがいいですね。何という木かなとかね。そうするとその木は何年ごろに植えた何という木かなとかね。ああこれは卒業生が卒業記念に植えた木だとか、小学校をつくったときに植えた木ということがわかりますよ。そういうことを一応知っておくと非常に、ある年齢になったときに、日野にいろいろな思い出が残るということになりますので、そのように心がけてください。

新村：言われてみるといろんな木がありますね。

谷：あるでしょう。学校の先生も知らない人が多いんですよ。それじゃ困るんでね。近いうちに学校でも木へ名札をつけるように、そういうことも必要だということですね。

新村：ああ、それは確かにいいですね。

谷：そういうこともあるのでね、これも一つの。ここもずっと田んぼだったですね。

山田ゆみ（図書館）：ちなみに図書館には「学校によく植えてある木」という、そういう図鑑があるんですよ。学校の校庭でよく見る木の図鑑というのがあるんです。

新村：あるんですか。

山田：普通の図鑑もありますけど、学校の木によく生えているという、そういうタイプの図鑑があるんですよ。

山田：車が来ます、寄ってください。

渡辺：こっち？

谷：はい、一応ここを渡りましょう。

渡辺：渡ります。

不明（子ども）：暑い。

渡辺：信号が変わったらみんな渡りますからね。はい、渡ってください。

谷：ここは前の日野市役所、日野町の役場があったところです。

渡辺：日野市役所は前、ここにありました。

谷：日野市役所が狭くなったので、いわゆる教育センターと建設部は向こうにできたわけですね。今空き地になっているところね。

【生活・保健センター】

谷：これは、一般に朝鮮人と言っていますが、

朝鮮民主主義人民共和国は1960（昭和35）年の1月に日野帰国集団として記念植樹をしたという記念碑です。これは1960年ですが、実際に日野の第1陣が朝鮮へ帰国したのは、1959年の12月に佐渡から18人の人が帰国しています。その18人という中には日本の女性が二人おられます。その二人というのは自分の家族が朝鮮へ帰るので、自分の旦那と子どもだけを返して自分が日本に残るわけにはいかない。自分の家族と一緒に生活をするということで、二人おりました、



記念碑前にて

その二人も一緒に朝鮮へ帰っております。ですからこれはそのときに第1陣で帰った人ではなくて、その人が、ああ記念植樹、日本で世話になったと。いろいろとみんな仲間だ、あとで植えるからよろしく頼むよというような願いを込めて、それで日野に残った人がここに建てたと。ですからこのはっきりしないのは、帰国するときにそういう、石碑をつくる人がそういう人に頼んで帰ったのか、帰ってからそういう人たちがつくったのかということは定かではありませんが、そういうことです。ですから帰ったときに一つ、日野の、やはり一緒に住んで家族が大事ですから、お母さんたちの気持ちをみて、

お母さんは自分の子どもだけが朝鮮へ帰ったんじゃない、そんなことはできないというので、日本の人も二人帰ったということです。これは日野広報にも載っています。それから毎日新聞にも載っています。もしあれでしたらあとで図書館のほうにその資料はお渡ししておきますので、折があったら見てください。



猪鼻洋助氏撮影
写真パネル

それじゃね、もう一つその横に「東京オリンピック」というのがあります。これはもうお母さんとかおばあちゃんぐらいになりますけど、昭和 39(1964)年ですから 47 年前ですか。東京オリンピックが来まして、それで東京オリンピックが初めてアジアに来たと。そのときに日野は聖火ランナー、これが走っているわけですね。その写真が渡辺さんのところかな、にあります。それからもう一つはここを、八王子まで自転車コースがあったわけです。ですから日野としては聖火ランナーと自転車ラリー、そういう二つの催しが東京オリンピックにはあったわけです。この碑はコンクリート製なんですけれど、市内の各公園だとか、当時のですね。当時あった公園だとか公共施設のところに建っていますので、今でも私が確認した段階で約 7 本ぐらい残っています。そのほかにもあったと思うんですけど、記録がもうなくなっちゃっているものですから、ありません。

谷：ですから聖火リレーは、結局日野を通ったのは、今で言うところの多摩大橋。あちらのところで昭島の人から受け継いで、第 1 組が日野駅の向こう側の四ツ谷と東光寺へ行く分かれ道、いわゆる東光寺入口のところが 1 組。そこでリレーを受けて日野の警察署が 2 組。そこから日野橋の北詰、向こう側ですね。立川にリレーをタッチしたわけです。それで 1 組が、距離は 4.7 キロあったんですね。それが 2 組に分かれて、それで 1 組が 23 人。年齢が 13 歳から 19 歳の人ね。そういう人が走ったわけです。ですから非常に、第 1 組は 2 分 28 秒で走れよと。第 2 組は 2 分 31 秒だと。第 3 組は 2 分 28 秒という具合に時間が決まっていたんです。きちつきちつと。そうしてないと最後のところは時間がわからなくなっちゃうからね。ですからそれをやるためには、それに出る人はもう前から何回も練習をしてやったと。

それでそのほかにいわゆる自転車のロードレースは、多摩地区で行なわれたわけです。多摩地区といっても、今の高尾山。高尾の駅のそばの多摩御陵というところから走って、それで甲州街道を来て日野橋を渡って、それで立川からずっと行って昭島へ行って、それで裏高尾のほうに行ってゴールになるということですね。これが団体であったわけです。それで個人レースは 2 回行なわれたんですが、個人レースは日野に来ません。全部八王子と昭島を主に回る。そういうことでやっております。これも毎日新聞には細かく載っておりますので、あとでこれも図書館の方にお渡しします。こういう具合に回ったということですね。東京オリンピック。10 月 10 日から 24 日だと。「来たり世紀の祭典」

ということで、これは日野広報に載っている。

不明：これが昔の？　すごい。

谷：そうです、昔のあれも出ています。こういう具合に。

加地：あのね、10月10日というのがオリンピックの開催日だったの。それで体育の日になったの。それだけは覚えておいて。

谷：そういうことがありますので、以上です。

不明：こっちから行く？

谷：そうですね、はい。それでね、この記念植樹は何かということなんです。これは新聞によると月桂樹です。オリンピックの場合には月桂樹です。それでそのときには八王子は杉ですね。杉を2万何千本も植えてあると思います。それで朝鮮の人が帰るときの記念植樹は何かということがはっきりしておりません。多分榿の木ではないかということ。それで皆さんちなみに日野市の花は何ですか？

不明（子ども）：菊。

谷：はい、菊ですね。じゃ、日野市の木は？

不明（子ども）：榿。

谷：榿だね。じゃあ日野市の鳥は？

不明（子ども）：カワセミ。

谷：はい、正解。偉い。

渡辺信雄：教職員より立派だ。

【山下地区】

谷：それで、今ここに住宅がありますね。この住宅は、日野に役場があった時分はここは畑だったです。じゃあ前はどこにあったかということ、今のこの通りですね。昭和52(1977)年にいわゆる市役所が向こうへ移ったと。移った前、旧のところにあったのは

この庭、全部ここにあったわけです。通りが整備されるのでここにあった家がこちらに来たわけです。こちらの田んぼへね。ここの新しい。ですからその当時はこの中央道ができるというので、ここは何年にこれはできたのかね？ 昭和 42(1967)年ですよ。42年に開通したわけです。道路を整備されたのでね。それでこの家が全部ここへ来ちゃったの。調布から八王子が 42 年です。

谷：まっすぐに歩いて行って。無理をしないでね、ちょっとこの信号を行きましょう。

不明：先にこっちへ渡ろう。まっすぐ渡ろう。

谷：まっすぐ来てください。

不明：はい渡ります。

新村：ここから全部屋号が山根だったんですか。

谷：そうです、山下ね。

新村：ああ山下。

谷：山下で、山の下にあるから山根。

新村：屋号というのは日野市のどのあたりまであったんですか、今の。

谷：いや、昔はそれぞれみんな、お店をやっているところはお店の。それでこういう所在しているところは家の呼び名ですね。

新村：日野台のほうとかは。

谷：あっちは特にありません。

新村：ああ、はい。

谷：信号が変わったら渡りますからね。

谷：百段階段って知ってる？ 百段階段。

不明（子ども）：何それ？

谷：階段。知らない？ 学校どこ？

清板：あそこの駅のところの松屋ってあるでしょう。あそこの後ろの階段は 127 段なんです。昔あそこの上に住んでいたから。今東光寺のほうに行っちゃったから。

谷：ああ、あの階段ね。私はあの近くは小峰とか加藤とか。

清板：小峰さん、知ってる。あれ、体育のやっています。あの大坂上の公園のところね。あそこは神社。お神輿出て来るじゃない、ここからも。この間出てたじゃない、神明神社って。神明社というの、来てたよ。

【神明社】

谷：ここは山下の神明社です。それで今皆さんがいるところが谷仲山の地区センター、その右側の小さい小屋があります。前になくなったいわゆる谷仲山の神輿の倉庫です。それで山下は、ここが一つの、山下と仲井との境です。それで、じゃあ山下とは、いわゆる昭和 20(1945)年代、いわゆる昭和、戦前というか戦後間もなくは何軒あったかという 9 軒。9 軒しかなかったんです。それでここから行く仲井は 7 軒、谷戸が 16 軒という具合に非常に、今数えたら非常に少ない。今増えたというのは昭和 30、40 年代以降、50 年にして大幅に住宅ができた。これもやはり日野の開発とそれからそれに伴うところの田が、いわゆる稲を作れなくなったために住宅に早替わりしたというのが 40 年代以降のことです。以上です。それでは神明社に行ってお参りして。はい、どうぞ。気をつけてね。



昭和 35(1960)年頃の
神明社 戸高要氏撮影



不明（子ども）：行ったことなかった。

不明：神社初めてだよ。

不明：疲れた？

不明（子ども）：疲れないけど。

谷：ここは谷仲の神明社です。この辺は特にここはいわゆる、皆さんも知っていると思いますが、源平の合戦で平家が敗れて、その平家の一族だったところの谷伊予が、結局こちらへ移り住んだということです。ですからそういう関係でこの神明社というのは非常に古いということではありますが、ただ、今までちょっと私が、さっき言ったようにこの辺に氏子が数十名ということが書いてあるのでよく間違えて、10軒そこそこしかなかったのが、こんな時代に数十名というのはおかしいという人がいるというわけです。ところが数十名というのは家じゃなくて氏子。家族で、おじいちゃんおばあちゃんから子どもまでね、1軒のそういう人が氏子ですよ。ですから一人一人を数えて数十名というのです。だから例えば10件で6人いたら60名ということになるわけですね。そういうことの氏子の数ですから、それを誤解しないようにね。氏子と、檀家とか、あるいはその、とは違うということね。1家と言わなきゃいけないね、そういうことです。それで非常にはっきりしないというかね、いわゆる。

御神体はどんなものがあるかということは今のところちょっと、皆さんにお知らせするようなどころまでまだ調べておりません。だからまたちょっと、いろいろと言うこともあって、そういう状況があるそうです。とりあえず八坂神社はこういうところがある。それと皆さんが見ていただく場合に非常に大きな木があるということですね。それとちょっとこちらを見ると、何か山が、1段じゃなくて2段ぐらいに何かこう、途切れてるなという具合に見えます。それは道路ができる場合と、一般に左へ曲がって、右へ曲がって、それで左に行って、階段に出ております。いわゆる曲がりくねったところの坂だったわけです。これを一般にこの辺では神明坂、神明坂と言っておったのです。神明神社のところの坂ですね。ですから今の下宿とか万願寺の畑へ行く人は、ここをリヤカーとか車を引いて上がるのは大変なので、谷戸坂を通るということが多かった。

不明：すごい坂。

不明：本当だ、坂ある、ある。

谷：そこをちょっと右へ行ってください。

不明：右だよ、右。

谷：坂のところを向こうに上がるの。階段の前。

【百段階段】

渡辺：百段階段。何段あるかな、本当は。

谷：やはり日野には、階段で大きいものですね。長い階段というのはここで、日野駅の西側の大坂上、上がる場所。あの大坂上は123でここよりは多いです。ここは何段かという、一般に、大坂上の場合は大体みんなが数えた人は123と言うのね。ところが下を見ていただくとわかるように、ここは階段じゃないですね、なってないですね。ここは階段ですね、一段違います。ですから左側を数えた人は111段。右側を数えた人は112段という具合になっているので、いや111だ、112だ、ですからこういう、ちょっと話題というかね、あれが入ってれば、それでここは日野のサッカーとか、それから野球をやる野球部の人たちは、毎日ここを上がり降りして体を鍛えているというので、いつも走っています。途中まで行って下がってください。

不明：降りておいで。

加地：そこまで何段あった？

不明（子ども）：18。

谷：途中で休むようになっていますからね。

加地：じゃあ今度そっちへ上がってきて、
そっちへ下がったら。そっちへ下がって数えて。

渡辺：違うの？ 不思議だね。なるほど。

降りるときと確かに数が違う。

不明（子ども）：17。

渡辺：1段違うのね。

加地：1段違ったろう。

不明：帰るよ。

加地：ここから渡ろう。

谷：気をつけてね。



百段階段に挑戦

渡辺：はい、渡ってください。

谷：時間があれば皆さん一度これを上がってね、どのくらいで上がったって時間を計ることもいいんですけど、ちょっとそれができませんので。

加地：いいかい。

不明：渡ってください。じゃあお願いします。

渡辺：それでは仲井地区に入ります。



山田：「行くよ」なんて言われちゃったから、あわてて数えられなかったよね。

不明：大変だった？

不明：結構大変？

昭和 20(1945) 年代の仲井
地区 下山隆重氏所蔵
写真パネル

加地：市役所へ通う人はここを上がっていき
くんですよ。

谷：前はカタクリがたくさん生えていたんですよ。神明神社のところからね。今も若干生えてきますが。それとあと彼岸花も。

不明：まだ咲いているね。

谷：それとホタルもいっぱい咲いているですね、ホタル。今でもちょっと。今少ないですよ。この向こうです。ここはもう少したつと、この藤の木が、藤の葉がいっぱいできるんです。見るとちょうど象さんに見えるわけですね。今でも実際ちょっと見ると象さんに見えますよね。これが大きくなると本当に象さんと、こっちに出たら人間のような形にね。

加地：象さんに見えるかな？ そういう花だよな。

谷：象さんが幾つも見えるから。そういうあれがね。こういうところに立つと象さんの鼻と耳がね。

不明（子ども）：夜、そこのところに目を付けておいてライトアップさせれば。

谷：そういうふうに移り変わりもよくわかる場所ですね。

【仲井の地藏堂】

谷：ここは仲井のお地藏さんところ。この近くの桜は日野でも一番早く咲くところ。お地藏さんのことはちょっと簡単に加地さんから話をしてもらってもいいと思います。



仲井の地藏堂

加地：ここは仲井地藏堂といいます。お地藏さんが二つ、それから庚申塔と馬頭観音という馬をそれからその新しいお地藏さんがありますので、皆さん見てください。ここへ、実はその、ここに台座が、実は「庚申供養」と入っているんですよ。ただこれはちょっと、この上がなくなっちゃったので、ここがよくわからないという形です。ただこの仲井の部落の守り神ですから、皆さん大事に祀ってくれているので、さっきと同じ青面金剛（しょうめんこんごう）。

谷：中井には前に稲荷様があったんですよ。それが大正 10(1912)年に八坂神社に合祀されておりますので、ここがその跡じゃないかということで、一応ここは。回遊地みたいになって。

不明（子ども）：これ何て読むの？

不明（子ども）：ほら、ここにも。

不明：あ、あったあった。

不明（子ども）：何でこっちへ行かないの。

【平野哲夫宅】

加地：中がギャラリーになっているので。

不明：お邪魔します。

谷：ここの平野哲夫さんです。

新村：よろしくお願ひします。

平野：皆さんに一応見てもらって、一応書いてありますけれど、まあ見てください。当時の。

加地：まつり珍しいね。

平野：かなりこちらは珍しいと思うんですけどね。

不明：拾ってきたんですかね。

平野：そう、このB29のね、多摩川に墜ちた。

新村：何か三小のほうにも高射砲があったとか。

加地：これって12年ですか。昭和12(1937)年ですよ。

不明：広告もやっぱり違いますね。

不明：今はこういうのはちょっとないと思います。

加地：これは実物見たことがあるんですよ。これね、原爆広場に飾ってありますよね。

不明：そうなんですか。

平野：原爆広場にありますよ。展示してありますよ。

加地：すみません、写真撮ってもいいですか。

平野：かまわない、いいですよ。

新村：僕も携帯で撮らせていただきます。



戦時中の遺物

加地：(この新聞は) 終戦記念日。

山崎：記念日というか、当時は記念日じゃないですね。終戦の日ですからね。

渡辺：すごい。

平野：これね、私は六小で当時のことを、しゃべってくれということで、それじゃあ絵にして持っていてくれますということで描いたんだ、当時のことを。だから描いてますと紙芝居みたいね。



平野哲夫さん

石嶋：これって北原の水車ですか、それとも共同水車ですか。

平野：これは今の公民館の、当時の、あの裏です。裏にあったんです。

石嶋：下町の。

平野：そうそう、あそこに。

山崎：進駐軍要員緊急募集。

不明：面白い。

不明：すごいマニアック。

不明：本当に面白いね、広告ね。

谷：ホタルの里です。今はもう少なくなっております。

不明：どこがホタル？

谷 (子ども)：はい、ここがホタルの里ですね。今はちょっと。

不明：今は出ないですか。

谷：今はやはり、少しは出ます。

不明：ああそうですか。

谷：そこに当時の、オリエントの防空壕があったんだけど、ちょっと下が。

渡辺：竹細工をやっているんでしょう。

【谷富二宅】

谷：ちょっと待って。自動車が出るからちょっと気をつけてください。

不明：こっち来て。車。

渡辺：車出ます。

不明：出るそうです、そこあけてください。

谷：それでね、いわゆる手動の井戸ポンプを体験して、もし体験したい人はやってください。

渡辺：じゃあ、井戸の水汲みをやりますよ。谷さんのうちへ入ってください。

新村：お邪魔します。

不明：ああ、井戸がある。



井戸ポンプに挑戦

【谷和彦宅】



谷：これは牛頭天王です。神主なんです。これが八坂神社のいろんな資料からいっても出てこないんです。これはずっと羽黒山等も全部入っています。前からね。一応こういうものがあるということ。子どもさんたちはこれを見て

穴倉へ行きます。

渡辺：子どもたちは穴へ行きなさいって。

不明：はい、どうぞ。

不明（子ども）：かばん置いていったほうがよくない？

山崎：これも気になる、穴倉も気になる。

渡辺（信）：中に、大昌寺だって書いてあつたでしょう。

不明（子ども）：ニワトリだ。

渡辺：普段ニワトリは寝るときどうするの。



防空壕にもなったという穴倉

【谷正幸宅】

不明（子ども）：すごい。

谷正幸：これは大正から昭和の初めに使ったやつ。これははかり。はかるもの。

渡辺：ああ、天秤？

谷正幸：天秤は、これここにほら、目盛りがここに書いてある。こうやって、ここへ誰かぶら下がって、ここでバランスをとってね、それでここに目盛りが付いてるの。

渡辺：天秤ばかり。

谷：それでね、蔵の中へ上がってみたい人は、今ちょっと上がってください。

渡辺：蔵の中を見てみたい人がいたら中に入ってください。順番にね。

不明：中を、これ見てもね。

不明：子どもたち、蔵の中。

石嶋：狭いので。気をつけて。

谷：置いてきちゃった、懐中電灯を向こうに。だめだな、何のために持って来たんだかわからない。

石嶋：危ないからゆっくりね。全員上がれないぞ。



谷正幸さん（右）

渡辺（信）：これ山芋掘るの？

谷：そうですね。

不明：山芋？

谷：穴を掘るの。これが薪割りのね。

渡辺（信）：よっぽど重たいものをはかった
だろうけど、持ち上げるだけ大変だ。

谷：結局、やるからね。

渡辺（信）：上げるにも持ち上げる力がないと計れない。

谷：そうですね。

不明：すごいね。

新村：降りてくるかな。

不明：気をつけてね。

渡辺（信）：20 貫、これで約 65 キロ。米俵 1 俵だ。

加地：そうですね、75 キロ。大体。

渡辺（信）：俺と同じぐらいだ。

加地：それでこんな越えたんだ。

谷：だから前は大体はかりというのは、米と、あとは薪（まき）。

渡辺（信）：薪、薪って目立たない。

谷：薪もやったあとではかるとね。それとあとは。

渡辺（信）：炭俵？

谷：炭ですよ。薪と炭ですね。

加地：これが 20 貫あるわけじゃなしに、こういうふうにして天秤棒ではかって、こっちの重さを。

渡辺（信）：こっちが 20 貫でこっちが 20 貫なら、あわせて 40 貫持ってなきゃならない。

新村：そうですね。

不明（子ども）：これ、どれくらい重いのか？

加地：大体 5 キロぐらいあるかな。

不明（子ども）：3 キロ以上。

渡辺（信）：この天秤棒にこれを付けてこうやって持ち上げると、それだけで結構な



大人気の天秤棒実験

目方になっちゃうんだよね。

加地：この使い方は、そこを持つんですよ。そしてそっちへぶら下げて。ついでに、じゃあみんなこの使い方をこれから伝授します。ここに一人力を入れてくれている？それでここを持つわけ。ここから、ここにこれをぶら下げるの。そうすると、いいか。いいよ、ぶら下げてみて。ぶら下げていいよ。ちょっと待ってね。

石嶋：危ない。

渡辺（信）：持ち上げられないってば。

加地：という形でバランスを取ると、これでバランスがうまく取れると。ただ、これを持たなきゃいけないんだね。

不明（子ども）：せーの。

不明：わあ。

不明：すごい。

渡辺（信）：違うんだよ、これでバランスを取るんだよ。

石嶋：おい、ちょっと危ないぞ。

渡辺（信）：そこを持っちゃだめだから、あそこで持たないと。これをこうやって場所を変えるわけよ。

加地：そう、これとかこれでね。そしてそのはかりを。

不明（子ども）：昔のとき水とかをここにぶら下げて。

不明（子ども）：それでこれを、バランスとって、で1貫とか10貫とか。

渡辺（信）：そう、で、ここで読むわけ。そこへ下げて。

山田：例えば計りたいものを、このリュック計りたいなと思ったらここに下げて。

加地：下げて、ここにおもりを移動させるわけ。

石嶋：全然軽いですよ、これ。こっちが軽い。

加地：これをこっちへ来るように。それで釣り合いがとれる。

山田：お米じゃないから。

不明：じゃ全然だめだよ。

山田：やっぱりすごく重たいものを計るのに使ったんだ。

不明（子ども）：じゃありゅック。俺のリュック重いよ。

山田：とんでもないことになっちゃったわね。



谷正幸家の土蔵

渡辺（信）：加地さん、あとで腕痛くなっても知らないから。

加地：いや腕はいいんだけど、俺、腰が痛い。

渡辺（信）：ちょっとバランスが取れてきたよ、ほら。少し。いやいや、重くなっちゃうから、こっちへいかないと。

井上：これ、人だな、やっぱり。

加地：相当のものでないとちょっと。

渡辺夫：この子がいいんじゃない、軽くて。

加地：今ぶら下がったからな。

渡辺（信）：今ぶら下がったの？ もうちょっとだって。またぶら下がりな。もういやだ？

加地：最後まで俺に持たせるの？

不明（子ども）：せーの。

渡辺（信）：はい、こっちを持って。

加地：用意ドン。

渡辺（信）：ぶら下がった？ 手を話さなきゃいいな。

加地：よしよし。おお。

井上：すごいんだ、これ。

加地：相当これ、計れます。

井上：相当重いものでなきゃだめなんだ。

渡辺（信）：ぶら下がってみたいような顔しているね。

井上：いや、相当重いでしょう。

山田：こういう実体験が一番楽しいよね。こういうことはね。

山崎：私の体重はかかってもらおうかな。

渡辺（信）：悪いけど減量してから来てくれ。

加地：出直しておいで。

渡辺（信）：持ち上がらないよ、お前重いよ。ここだ、こうすれば持ち上がる。

井上：ぶら下がれないんだ。

渡辺（信）：何だ、やめちゃったのか。

不明（子ども）：もう一回。

渡辺（信）：手が痛い。重たいよ。何かにぶら下げておけば大丈夫だね、持たないで。

井上：いった、いった。

不明（子ども）：手が痛い？ ちょっとさわらせて。

渡辺：はい、それでは皆さんいいですか。

谷：あれはね、そこの、ちょうど屋根があるでしょう。屋根の一番左側。あそこのほうにあったんです。

石嶋：大野さん。

谷：そうです、昔の大野さんね。そこにあったのが、そこを緑地帯にして、その道路が広がったりしたので、それでこれを大昌寺のほうへ移したということです。それでここはオリエント時計。オリエント時計の寮があったところです。

渡辺：そうだね、ここにあったんだ。

谷：ええ、ここにあったです。

清板：エプソンが見えた。

渡辺：こんなに来ない。

清板：全然来ないから。

渡辺：何か見晴らしもいいのよね。

谷：今この向こうへ入って、家がもうできてあるんですよ。

清板：自動車よ、ほら、端に寄って。

谷：自動車が来ますから端に寄ってください。左に行きますから。

谷：どうしてそうなっているかなというとな、これはやはりこの日野台地ができたときのいきさつですね。富士山と箱根の火山の関係で、石がみんな焼けちゃったわけです。ですから浅川系統は焼け石が多いわけですね。多摩川は焼けないから古いわけですね。そういうことの、いわゆる地層のあれもわかるわけですね。で、少し雨が降るとこの辺

は水がどんどん湧いて来ますから。

不明（子ども）：清水が湧いているよ。

谷：あれ、そば屋さんの子だ。

不明（子ども）：はい、？屋の、お母さんがいところです。

谷：あそうか、じゃあわかった。

不明（子ども）：今立ったところの？がおばあちゃんの兄弟の家で。

谷：おばあちゃんの娘さんがお母さんですよ。

渡辺：こんなところに水が。

谷：これを見てもらえるように、こうやって水が湧き出すわけです。

渡辺：わあ、本当だ。

新村：すごい。

渡辺：こんなところ来たことないね。

新村：初めてです。

谷：こういう地下から出てくるのはきれいですからね、一応土を通っているわけなので。

辻雄佑：ろ過されて。ふうん。

谷：こうやって今でも水がね。この前のときは水がもうここに。

新村：この前の雨の後？

渡辺：こんなところ来ることないね、本当に。

新村：初めて。

渡辺：この？って、どこのうちがやっているの？

谷：高速道路。

渡辺：知っているんだけど、何ていううちがやっているの、ここは。

不明（子ども）：これ何？ これ。

谷：ああ、これはね？

新村：ここはさっきの道？ ああ、なるほど。

谷：ここでやったのを、何といたっけな。ナットのそれ、それで止めてあったでしょう、鐘を。それが錆びたやつ。ボルトでやってナットで止めるでしょう、そのナット。

不明（子ども）：特に珍しくないよね。

谷：一つじゃない。これはね、古いやつじゃなくてね、いわゆる植木なんかを植える植木鉢のやつ。

不明（子ども）：門があれば大丈夫？

谷：だからおじさんのところにある。

不明（子ども）：乗ったことある？

不明（子ども）：この次ってS Lに行くんですか。

【タキセ製作所】

不明（子ども）：こんにちは。

石嶋：こっちへ並んで。

谷：みんなよく聞いて。

渡辺：いいですか。それでは中に大変な、大事な電車とかいっぱいあるので、決して

さわらないで見てください。

滝瀬：郊外図もあるんです。それから沼津から国府津まで山があつてね。

渡辺（信）：前と後ろから。

滝瀬：これは交通博物館の入り口があると思うんですけど。

新村：釜ってこんなに大きいんですか。

滝瀬：そうです。それで釜も。

井上：目が点になるね。

滝瀬：ええ、ここから石炭を入れる。



滝瀬さん

不明（子ども）：今は石炭入っているの？

滝瀬：いや、今は入ってない。今は空気を。

渡辺（信）：ガスを入れているの。

滝瀬：石炭を入れる釜も手づくり。このボイラーもつくっているの、正確に言うと。

渡辺（信）：でもないの、こんなのつくらなきゃ。つくらなきゃないんだ。

滝瀬：そうです。

新村：すごい。

渡辺（信）：何と言ったらいいんだろう。ここに釜が入るわけですか。

滝瀬：これ、3年間で、3年ぐらい前までずっと走っていたんですよ。で、ちょっと調子悪くなったので直したんです。

渡辺：うそ、信じられない、何か。

渡辺（信）：1 から 10 まで全部手づくりだっ
て言うじゃない。

渡辺：すごいわね。

渡辺（信）：エンジンまで手づくりだ。

滝瀬：これで逆転するんですよ。

井上：今度は逆周り。

渡辺（信）：交代できるんだ。

渡辺：すごいね。

滝瀬：車と同じなんですよ、ほとんどはね、大体。これが車で言うギアでもって、こ
こに棒があって、これが上下することによって動きが。ピストン。

渡辺（信）：これをピストンで持ち上げる？

滝瀬：蒸気を左右に分ける。これがそう、さっき動いただろう、上に行ったり下に行
ったり。

新村：すごいですね、これ。広いですね、ここは。びっくりしました。

谷：一応子どもたちが終わったら大人の人に乗って大丈夫ですから。ちゃんと話をし
てありますから。

新村：あ、乗せていただけるんですか。ありがとうございます。

谷：乗りたい人は。例えばそこからここでも、時間はかからないの。



製作中の蒸気機関車



運転手：渡辺さん

のでいただいでください。ちょっと私も乗りたいんだけど。

不明：私も乗りたいんだけど。

不明（子ども）：乗るな。

渡辺：乗ります。

渡辺：最後のここ、滝瀬さんの家にびっくりしたでしょう。全部滝瀬さんのおじさんが手づくりでね。一台の電車でも何年もかかるのもあるんだって。本当に細かいところも。あのね、20年かかってまだできてないのもあるんだって。すごい、本当に、そういうお宝をつくっている滝瀬さんに皆さんでお礼を言いましょう。滝瀬さん、どうもありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

渡辺：どうもありがとう。

滝瀬：大変だけどね。

渡辺：すごいすごい。いや本当、大人もびっくりよね。

清板：いつもはあれだったからね。いつも見ているだけだから。

渡辺：今日はここが最後で、ここで自由解散になります。ちょっと待つてね。電車の運転をしていただいた渡辺さん、皆さんお礼を拍手でお願いします。どうもありがとうございました。

谷：乗ってない子は乗ってみて

ください。何人かな？

不明：一人かな。

谷：なるべくそこを歩かないようにして。線路の上は。石があったり、ちょっとしたあれでね、小さいからね。

渡辺：飲み物の用意ができています

谷：子どもさんは何人いたっけ？

渡辺：15～6人いたかな。

谷：じゃあ間に合うな。これは滝瀬さんがつくってくれたキーホルダー。

渡辺：え、すごい。

谷：子どもさんだけにあげますから。

渡辺：くやしい。

渡辺（信）：僕も親父の子どもです。

石嶋：順番、並んで。

渡辺：どんなキーホルダー？　すごい。

石嶋：並んでください。

滝瀬夫人？：そうね、好みがあるので。

石嶋：ちゃんと並ばないともらえませんよ。

不明：あれ、並んでいるんじゃないの。

滝瀬：車両のレールを細かく切ったものです。

渡辺：すごい、見せて。本物の線路の、ほら。いいなあ。

石嶋：すみません、資料としていただきます。

矢沢：資料として。

渡辺：図書館がちゃんと保存。

山田：どんなのをもらったの？　見せて。

新村：伸びる伸びる。

山崎：本当だ、結構ずしっと。

渡辺：何をもらった？ あ、線路がくつついている。

不明（子ども）：クローバーが好きだから。

新村：ああ、きれいなクローバー。

不明（子ども）：重い。

渡辺：本当だ、いいなあ。

不明：よかったね。

新村：これはいいですね本当。

谷：待って、資料館へね。

渡辺（信）：何で二つも持っているんだよ、お前たち。おかしいな。

新村：あれ？

渡辺（信）：何かそういうのとは違う笑い方をしているように思える。この子たちの笑顔は何か資料を手にしたという喜びとは違うと思う。あなたは何の資料なの？ これはお地藏さんとは関係ないと思う。

新村：結構すごい。

加地：郷土資料館へ寄付しよう。

辻：子どもっぽいというか。

新村：これはすごい。